

主要登場人物

ラインハルト・フォン・ローエングラム

(Reinhard Herzog von Rohengramm)

金髪と蒼氷色の瞳を持つ貴公子。戦争の天才。銀河英雄伝説の主人公の一人。元帥。ローエングラム公爵。帝国軍最高司令官にして独裁者。

ジークフリード・キルヒアイス

(Siegfried Kirchais)

ラインハルトの腹心であり親友。ルビーを溶かして染めたような赤毛と感^じの良い青い目の長身の若者。上級大将。戦場で決して逆上^らない、智と勇を兼ね備えた帝国軍屈指の驍将。

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

(Annerose Gräfin von Grunewald)

ラインハルトの姉。一五歳の時、時の皇帝フリードリヒ四世の後宮に納められ、グリューネワルト伯爵夫人となる。そのフリードリヒ四世の死後、ラインハルトたちの許へ戻るが、その後、わけあってフロイデンへと隠棲する。

ヒルデガルト・フォン・マリィンドルフ

(Hildegard von Mariendorf/Frau in Mariendorf)

マリィンドルフ伯爵家の一人娘。伯爵令嬢マリィンドルフ。通称ヒルダ。短くした、くすんだ金色の髪とブルー・グリーンの生き生きした瞳の、美貌の少年を思わせる女性。帝国軍幕僚総監に任じられ、中佐待遇でラインハルトの遠征に同行する。

オスカー・フォン・ロイエンタール

(Oskar von Reuenthal)

帝国軍上級大将。青い左目、黒い右目の金銀妖瞳の美男子。ミッターマイヤーと並んで『帝国軍の双璧』と称される名将。智と勇のバランスにおいては、ラインハルト、ミッターマイヤー、ヤンを凌ぎ、キルヒアイスに比肩すると評される。漁色家。

ヤン・ウエンリー

(Yang Weng-ii)

同盟軍大将。イゼルローン要塞司令官・兼・駐艦隊司令官。歴史を学ぶ目的で同盟軍士官学校に入り、そのまま意に反する形で軍人となる。「エル・ファシル」で多くの民間人を救い、若き英雄となる。銀河英雄伝説の主人公の一人。

フレデリカ・グリーンヒル

(Frederica Greenhill)

同盟軍大尉。知性と美貌を兼ね備えた、ヤンの副官。

ユリアン・ミンツ

(Julian Mintz)

トラバース法でヤンの養子になった、亜麻色の髪の中々に端正な顔立ちの少年。ヤンの許で軍人を志し、本編ではフェザン駐在武官となっている。少尉。ちなみにA.T.O.K.で初めて「トラバース法」を交換した時、「虎バース砲」と出た。

ウランフ

(Uranf)

同盟軍中将。原作に反して、帝国領侵攻作戦時の惑星リューゲンでの戦いに生き残り、第一四、第一五艦隊の編成と訓練に当たると共に、ビュコックやヤンのよき相談相手になっている。現在は第一一艦隊

司令官

アレクサンドル・ビュコック

(Alexander Bucock)

アムリッツア後、大将となり、同盟軍艦隊司令長官となる。同盟軍の宿将。原作黎明編ではもっと怖いオッサンかと思っていたが、その後、案外に話の分かる老師という感じの人であることが分かった。

ヨフ・トリューニヒト

(Joh Trunicht)

同盟最凶の政治家。現時点ではそれ以上のコメントなし。とにかく、歩く最凶。

ウォルター・アイランズ

(Walter Islands)

ネグロポンティの跡を継いで、国防委員長となった人物。銀英伝の読者にはお馴染みの、五〇年間の睡眠よりも半年の覚醒で後世に知られるようになった人物。優れた政治家としての資質は持っていた人なんだろこと思っ。

ドーソン

(Dawson)

大将。同盟軍統帥本部長。ジャガイモ野郎で伍長。

アドリアン・ルビンスキー

(Adrian Rubinsky)

フェザン自治領主。

ルパート・ケッセルリンク

(Rupert Kesselring)

フェザン自治領主補佐官。父親に似ず、頭髪に恵まれてる(OVAを見る限り……)。

本編オリジナルキャラクター紹介

グレーチエン・ヘルクスハイム



(Margareta Therese von Herxheim)
OVA『奪還者』に登場した

ヘルクスハイム伯爵の娘で亡命者。亡命後、グレーチエン・ヘルクスハイムを名乗るようになる(ことにした)。紫水晶の瞳と淡い金髪、端正な顔立ちの女性。本編では一七歳。少尉候補生としてルエヴェト星系のJL二七基地に赴任している。本編の主人公。

ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンディング



(Menzel Heinrich von Bendling)
同じくOVA『奪還者』で

最後にマルガレータを同盟へ亡命させる上での後見人として、彼女に同行した、伯爵家の三男坊。本編では、同盟軍統帥作戦本部情報部・対帝国情報課長代行を務めている。

ティフリー・ブランドン

(Tiffany Brandon)

同盟軍士官学校でのグレーチエンの同期生。クルーカットの髪型、頑丈な体つきを生真面目な若者。現在は少尉候補生として、グレーチエンとともにJL二七に赴任する。

シャルロッタ・ゼーダーシュトレーム

(Charlotta Söderström)



同盟軍士官学校でのグレーチエンの同期生。通称ロケットィ・セーデル(Lotti Söder)。黒髪・黒瞳の、グレーチエンよりも実年齢二歳年上、グレーチエンの親友。本編では第一艦隊に配属されている。

フランツペーター・ヨハネス・バウアーシュミット

(Franzpetar Johannes Bauerschmitt)

帝国宰相府付き宿直医で、国立オーティン文理科大学医学部准教授。膠原病の専門研究者としての実績もあり、同時に臨床医としても優秀な経歴を持った若い医師。苗字がこともあろうにバウアーシュミットであるのは、筆者の趣味に属する。

コルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー

(Cornelia Gertrude Vizegräfin von Schmittbauer)



シュミットバウアー子爵家当主。シュミットバウアー子爵夫人。通称ゲルタ。皇帝エルウィン・ヨーゼフ二世を誘拐し、二週間あまりも帝国軍の追求をかいくくつてのけた。ラインハルトが皇帝に対する処遇を改める旨を公表したことから、皇帝と共に戦没者記念墓地に現れ、夫と兄の墓所の前で事切れる。始祖がルドルフ一世から与えら

れた。『帝室のために身を挺せよ』の言葉を最後まで実践した、シュミットバウアー一族の最後の一人。ヒルダの友人でもあった。白兵の名手でもあり、キルヒアイスとは二度、ラインハルト自身とも一度、直接に白兵戦を戦っている以上、『木漏れ日と遠き日』迄。

元々、原作での『余りに弱すぎる門閥貴族軍』に、一家くらしい、ラインハルトに一矢を報いる貴族がいても良いだろうと言うことで登場した。兄ヨハン・クレメンツはラインハルトの暗殺を、夫ヴィンフリート・フォン・リーフェンシュタールはリップシュタット戦役での大逆転劇をそれぞれ狙ったが、いずれも目的を達し得ずに斃れている。言ってみれば、悲劇の一族の末裔である。

『木漏れ日と遠き日』で彼女が打った様々な策が、その死後も帝国と同盟に大きな影響を与え続けることになっているので、ここで敢えて紹介。

ヒラーデ

(Joe Genuta Harada)

同盟軍大佐。JL二七駐留艦隊参謀長。アムリツアの生き残り。アムリツアで艦を失い、一人生き残ったために軍から冷遇され、その恨みから亡命者であるグレーチエンを偏執的に憎悪する。

コティ

(Alban Coty)

兵長。巡航艦『ベッドフォード』偵察員。

ヘイデンスタム

(Rupert Heidenstam)

同盟軍大尉。グレーチエンの直属上官。JL二七駐留艦隊の作戦先任参謀。